

板谷波山記念館 所蔵品展「夫婦窯～波山さんとまるさん」

出品目録

作品名	作者名	制作年	サイズ	無記入：通年 前期展示：11/1～1/19 後期展示：1/21～3/19
夫婦窯 波山とまる				
三方焚口倒焰式丸窯 (田端窯採取)		明治 37～38 年頃		
マジョリカ写蕪文皿 [銘玉蘭]	板谷波山・まる	明治時代末期	縦 15cm 横 19.5cm	
彩磁花卉文香炉	板谷波山	昭和 20 年代	口径 10.5cm 高さ 2.2cm	
青磁袴腰香炉	板谷波山		口径 6cm 高さ 25.5cm	
辰砂釉延寿文花瓶	板谷波山	昭和 10～20 年代	口径 15.2cm 高さ 12cm	
淡黄磁花瓶	板谷波山	昭和時代前期	口径 8cm 高さ 18.1cm	
結晶釉花瓶	板谷波山	昭和 10 年代	口径 6cm 高さ 12.2cm	
葆光白磁唐草文壺	板谷波山	大正時代後期～昭和時代前期	口径 3.3cm 高さ 15.8cm	
前途洋々の乙女たちへ				
クローバー帯留め	板谷波山	1961 (昭和 36) 年	縦 3.5cm 横 3.5cm	前期展示
白磁人物帯留め	板谷波山	昭和 20 年～30 年代	縦 3.2cm 横 4cm	前期展示
葆光彩磁鮎帯留め	板谷波山	昭和 20 年～30 年代	縦 2.3cm 横 8cm	前期展示
延寿帯	板谷波山	昭和時代前期	縦 30.5cm 横 385.6cm	前期展示
帯下絵 (百合と蝶図)	板谷波山	昭和時代前期	縦 28cm 横 42cm	後期展示
刺繍帯	板谷まる	昭和時代前期	縦 30cm 横 372cm	後期展示
まるコレクション				
簪・筭	板谷まる私蔵	江戸時代後期	簪：最長 21.6cm 筭：最長 17.7cm	
スクラップブック (御朱印・新聞記事・名所絵葉書・プロマイド)	板谷まる私蔵		(最大) 縦 30.5cm 横 22.6cm	
家族と芸術を愛するまる				
都忘れ図	板谷まる	1945 (昭和 20) 年	縦 29.5cm 横 21.7cm	前期展示
紅梅図	板谷まる	1949 (昭和 24) 年	縦 151cm 横 45.3cm	前期展示
梅花小禽図刺繍額	板谷まる	1892 (明治 25) 年	縦 31cm 横 89cm	後期展示
椿図	板谷まる	1950 (昭和 25) 年	縦 146cm 横 55.3cm	後期展示
能を嗜む夫婦				
宝生流観能会ポスター	板谷波山	1947 (昭和 22) 年	縦 51cm 横 37cm	
謡曲本・箱・書見台	板谷波山		本：縦 23.7cm 横 16.6cm 箱：高さ 47cm 書見台：高さ 20	



波山が陶芸家として歩みはじめた頃、僅かな生活資金で当時、妻と子供3人を抱えながらの生活を送っていました。

その時を振り返り「大変貧乏をした」「女房（まるさん）には苦勞をかけた。よくやってくれた」と波山は語っています。

生活が懸かった、まさに命がけの制作だったのです。そんな夫を支えたまるさんは天真爛漫で明るく、また自分でも絵を描くなど、芸術への理解が深い人でした。波山にとっては「戦友」のような存在だったことでしょう。

まるさんという女性について…

福島県・河沼郡坂下町（現・会津坂下町）出身。

共立女子職業学校（現・共立女子大学）に入学し、刺繍の他に日本画や図案を学びます。そして同郷で慈善福祉活動家・瓜生岩子との出会いにより福祉活動へ関心を持つと、卒業後は岩子の後押しにより、故郷では当時まだなかった女子教育の場を提供すべく、会津女子職業学校（現・県立葵高校）の設立に奔走します。東京に戻り結婚後は夫の金沢転勤のため、長女百合子を連れて再度帰郷。今度は地元で刺繍塾を開きます。



東京に戻るため、刺繍塾生徒との最後の集合写真（中央列右から4人目がまる、その左斜め前に長女百合子）

夫が東京へ戻ることを聞きつけ、刺繍塾を閉めてしまいましたが、その後も髪結いの免許を取得するなど、まるさんの向上心は ↗

留まることを知りません。

まるさんのそういった前向きで、人に尽くすことに勞をいとわない性格に、波山さんは心惹かれたのでしょうか。

まるさんを芸術の世界へ導いた人

あとみぎょくし

跡見玉枝（1859～1943）

跡見学園を創立した跡見花蹊の従姉妹。花蹊から四条派の手ほどきを受ける。内親王御用掛を拝命、皇室に作品を献上するに至る。まるは女学生時代に師事し日本画を習得、「玉蘭」の号を得た。

夫婦が慕っていた人

うりゅういわこ

瓜生岩子（1829～1897）

福島県小田付村（現・喜多方市）出身。戊辰戦争では負傷兵看護に奔走し、生活困窮者のための支援活動などを行い、日本のナイチンゲールとも云われる。

まるは岩子の内弟子であり、夫婦のために田端宅の土地を援助したり、媒酌人をつとめた。また、窯焚きの際には東京・浅草寺に祀られている岩子の像に手を合わせて祈願するなど、夫婦は岩子を終生慕っていた。

私生活でのふたり

天真爛漫なまるさんのまわりは笑いが絶えず、疎開先の下館でも大変な人気者ぶり。一方の波山さんも、ハンサムかつお洒落で、いつも女性に囲まれニコニコ状態。これを見て心の広いまるさんもさすがに心穏やかとは

いかず、しばしば夫に猛抗議、

どこにでもある夫婦喧嘩となりました。

波山さんはあきらめ顔で、まるさんを

「たまらん女子（雅号の玉蘭から）」と、

秘かに呼んでいたそうです。

